

学会報告

日独エイズシンポジウム（第1回）を開催して

岡本 尚¹⁾, 市川 誠一²⁾, 内海 眞³⁾, Norbert H. Brockmeyer⁴⁾

¹⁾ 名古屋市立大学大学院医学研究科, ²⁾ 名古屋市立大学大学院看護学研究科, ³⁾ 高山厚生病院,

⁴⁾ Bochum 大学医学部, ドイツ・エイズ学会会長

言うまでもなく HIV/エイズの拡がりは一国や一地域にとどまらず、まさに世界的な問題である。我が国においては国内のみならず周辺諸国特に東アジアでの拡がり懸念されている。HAART (highly active anti-retroviral therapy) による HIV 治療が導入されている先進国であっても、ドイツでは感染者が近年一転して再び増加傾向を示し、日本では今なおエイズ患者・感染者の報告数の増加が続いている。しかしながら、一般市民・行政・メディアの間での関心は年ごとに薄まっている懸念さえ持たれる。こうした現状を踏まえ、また日独交流推進の一環として、日本およびドイツのエイズ研究者による第1回日独エイズシンポジウムを開催した。ここでは、その概要を紹介する。

1. 日独シンポジウム開催の背景

先進国の HIV/AIDS 治療は、HAART の導入によりエイズ死亡が大きく改善した。しかし、途上国はその恩恵を受けることができず、エイズは医学的、社会的に大きな問題となっている。HIV 感染は、これまでのサハラ砂漠以南地域での流行に続き、今後はアジア地域で拡大が懸念されている。また HAART はその効果が示されている一方で、副作用や薬剤耐性ウイルスの出現などの問題を有している。

日本では HAART が導入されているにもかかわらず新規エイズ患者の報告数は増加が続いており、また、新規の HIV 感染者報告数も増加が続いている。2004 年の年間報告数は HIV 感染者 780 件、エイズ患者 385 件、初めて 1,000 件を超え、この 10 年間で 3 倍の報告数に達する状況となっている。感染経路をみると、HIV 感染者の 60% を MSM (men who have sex with men) が占め、異性間の性的接触は 25.6% である。地域的には東京、大阪、名古屋など大都市部からの報告が多く、特に名古屋では近年急峻な新規感染者/患者の増加が示されている。さらに、近年の若い世代でのセクシュアルネットワークや性行動の変化は、HIV/性感染症の拡大を危惧するものである。しかし、日本では、メディアは HIV/AIDS を取り上げることが少なく、そのため一般市民の HIV/AIDS への関心も低い現状となっている。日本のエイズ問題の中で、最大の問題は国民のエイズへの無関心であるといえよう。

こうした状況から、日独両国のエイズ研究者のみならず地域社会でエイズ対策に関わっている人々が一堂に会し、基礎医学・臨床医学・社会医学の垣根を越えて交流することは、市民を対象にしたエイズ対策について国境を越えて情報を交換することとなり、HIV/AIDS の課題を解決する上で、また市民参加型の国際交流として、大いに意義があるものと考えられる。

2. 日独シンポジウム開催の目的

HIV/AIDS の課題解決に貢献するために日独両国の関係者が交流し、情報交換を進めることを目的とする。そのために、エイズ研究者のみならず地域でエイズ対策に関わっている人々が一堂に会すること、日独両国の地方行政 (ドイツ国 NRW 州と愛知県、名古屋市) のエイズ担当者が交流すること、基礎医学・臨床医学・社会医学の垣根を越えて交流すること、そして市民を対象にしたエイズ対策について国境を越えて情報を交換する機会とするために、社会医学のセッションでは日独両国の民間の非政府組織 (NGO) からの発表も交え、市民参加型の国際交流の場とすることにした。

3. 日独シンポジウムのプログラム

ドイツからは、Michael Stueckradt 氏 (ドイツ NRW 州科学技術省副大臣) と Martina Munsel 氏 (同省国際交流課長) の 2 名の行政官、7 人のスピーカー、および 1 名の取材記者が来日した。日本からは 11 人のスピーカー、愛知県、名古屋市のエイズ担当者、および中日新聞記者がシンポジウムに参加した。シンポジウムは、基礎医学、臨床医学、社会医学の 3 領域からなり、会期とプログラムは下記のようなであった。

開催に先立ってポスターを作成し、東海地域を中心に関連領域の専門家に対して個別に広報を行った。シンポジウムでの基礎医学、臨床医学の領域の発表は公用語を英語とした。また、基礎・臨床の専門的な研究発表に加え、社会医学領域では実際に市民向けの啓発活動を実施している NGO からの発表が行われた。ドイツからは全国的なエイズ啓発活動を展開しているエイズ Hilfe が、日本からは名古屋市内で活動している NGO 団体 TAT が発表を行った。

なお、このセッションは一般市民対象の公開シンポジウムとして、新聞、テレビ等で広報を行った。一般公開とするため、使用言語は発表者に一任し、日・英混交のセッションとなった。ただし、あらかじめ発表資料を配付し、参加者の便宜を図った。また、日本側の発表についてはスライドごとに英語のサマリーを主催者側の用意した担当者が読み上げた。この公開シンポジウムには66人の参加があり、シンポジウムを通しての参加者は88人であった。開催決定からの日程が極めて短期間であったため十分な周知ができなかったことが反省点のひとつとなった。

4. シンポジウムを実施して

このシンポジウムでは、HIV/AIDSの基礎医学、臨床医学の研究領域で中心として活躍している研究者が、日独両国からシンポジストとして参加していただき、最新の成果の発表をもとに活発な議論がなされた。また、これらの研究領域に加え、社会医学領域においても日独両国からそれぞれ地域で活動しているNGOメンバーが参加し、それぞれの具体的な活動プログラムに関する発表があったことも特徴として挙げられる。ドイツのエイズHilfeは全国的な組織であり、その積極的に効率的な活動はすでに定評が

第1回日独エイズシンポジウムの日程と演題・演者名

会期：平成17年11月9日（水） 会場：名古屋市立大学病院・中央診療棟3階大ホール

プログラム：

- 10：00-10：10 開会の挨拶 Dr. Michael Stueckradt（ドイツ NRW 州科学技術副大臣）
- 10：10-13：00 HIV/AIDSの基礎医学
- The role of immunogenetics and immune selection by CTL in HIV-1 infection
Dr. Thomas Harrer
- Human retrovirus infections and their control Dr. Naoki Yamamoto
- Trapping system of HIV : New systems for construction of infectious molecular clones
Dr. Masashi Tatsumi
- Pathogenesis of HIV-dementia : from animal model to clinical studies Dr. Sieghart Sopper
- HIV-1 infected macrophages induce astrogliosis by SDF-1 α and matrix metallo-proteinases
Dr. Mika Okamoto
- Molecular mechanism of HIV transcription and therapeutic interventions Dr. Takashi Okamoto
- Viral entry and transcription as targets for inhibition of HIV-1 replication Dr. Masanori Baba
- 14：30-16：50 HIV/AIDSの臨床医学
- The German Competence Network HIV/AIDS—Structures, strategies, and selected projects
Dr. N.H. Brockmeyer
- Reduction of Efavirenz dose in HIV-1-infected patients with CYP2B6*6/*6—the first step of the tailor-made therapy of HIV-1 infection Dr. Shin-ichi Oka
- Changes in prevalence and patterns of drug resistant mutations in Japan—Summary of nine years nationwide HIV-1 drug resistance monitoring study from 1996 to 2004
Dr. Wataru Sugiura
- Development of vaccines against HIV/AIDS in European Networks Dr. Hans Wolf
- Peptide-loaded dendritic-cell vaccination followed by treatment interruption for chronic HIV-1 infection : A phase 1 trial Dr. Tetsuya Nakamura
- 17：30-19：30 HIV/AIDSの社会医学（一般公開）
- ドイツエイズ学会長の挨拶
Dr. N.H. Brockmeyer
- ドイツにおける HIV/AIDS—その構造と構成する要素
Ms. Viviane Brunne
- 男性同性愛者における HIV 感染の予防啓発活動
Dr. Seiichi Ichikawa
- 「構造的予防法」：非政府組織ドイツ・エイズ Hilfe の HIV 予防について
Mr. Steffen Taubert
- TAT の活動報告—若者たちを HIV から守るために
Ms. Yoshiko Ishikawa
- 19：30-20：00 交流会

ある。本シンポジウムでも多数のポスターやパンフレットなど訴求性の高い啓発資料を持参して発表会場内に掲示した。ドイツでの HIV 感染症の発生状況は日本と類似しており、近年では男性同性間の感染が増えつつある点でも類似している。

国際エイズ会議、アジア太平洋地域・国際エイズ会議、あるいは学会総会のシンポジウムを除けば、エイズ問題で日本と外国の2国間でこのような広い領域のシンポジウムを開催したのは初めてのことと思われる。特に、実際にエイズおよび感染者対策を担っている地方政府レベルでの接触が積極的にもたれたことは特記すべきことであろう。

このシンポジウムの準備が進むにつれて、日本とドイツとの間での相違点を感じるものが多くあった。例えば、基礎・臨床の研究者に加えて、NGOを加えた企画がドイツ側の希望により当初から組まれていたこと、ドイツの地方行政のエイズ担当者（科学技術省次官と国際交流課長）が愛知県健康対策課と名古屋市健康増進課を訪問し情報交換を積極的になっていたこと、さらに新聞等のメディアを通じて国内に報道するために取材記者が同行していたことなど、である。取材記者は、シンポジウム以外にも名古屋市内のエイズ啓発活動に関する取材を行い、帰国後には新聞に詳細に紹介していた。エイズ問題に対するドイツの国もしくは州政府としての姿勢の一端を見たような感がある。

5. ビジネスミーティングの概要

シンポジウムの翌日、日独のシンポジストとこのシンポジウム開催に加わった組織委員の数名で、1) 今回のシンポジウムの反省、2) 今後の日独協力と方向性、3) 第2回日独シンポジウム、に関する会議を開いた。この会議における概要は以下のようであった。

第1回日独シンポジウムは短期間の準備にもかかわらず、また、1日という短時間の会期であったにもかかわらず、内容のあるシンポジウムとなったことが確認された。このことは主にドイツ国 NRW 州（ドイツ側のシンポジストおよび関係者の旅費等の経費およびシンポジウムの広報に関する費用など）と日本側主催者の属する大学（日本側の発表者の旅費と滞在費を負担）の積極的な関与の賜であった。また、日独両国からのすべてのシンポジストが HIV/AIDS 問題の重要性を考慮し、多忙な日程を調整して参加したことによって、高いレベルの発表となり、その結果意義あるシンポジウムとすることができたと言える。

今後のわが国におけるエイズ研究の進め方を考える上でも、基礎医学・臨床医学・社会医学/予防介入の全ての領域に携わっているドイツの研究者と専門領域を越えて交流することには大きな意義があった。また、ドイツでは HIV 流行阻止に HIV/AIDS competence network を構築し、構造的にこの問題に取り組んでおり、この点でも我々が今後彼らから学べることは多いと思われる。



写真 第1回日独エイズシンポジウムを終えて（名古屋市、徳川美術館の庭園にて）
向かって右側から、Ms. Viviane Brunne, Dr. Norbert H. Brockmeyer, Dr. Takashi Okamoto,
Dr. Thomas Harrer, Dr. Hans Wolf, Dr. Sieghart Sopper, Mr. Steffen Taubert

会議には一般市民を含め多数の参加があり、特に、最後の社会医学のセッションは一般公開としたが、これらの講演に対しても聴衆から熱心な質問があった。また、東海地区のメディアの関心も高く、中日新聞では、11月7日と10日の2日にわたりシンポジウムに関する報道があり、中京テレビ放送からも事前の取材を受けた。このような二国間の交流が単なる情報交換にとどまらず、様々な分野での人的交流を積極的に促すためには、今回のような会合を定期的に持つことも重要と考えられる。

日独交流については今後も継続していくことが望ましいことで一致した。共同シンポジウムの開催のみならず、研究者の交流や共同研究の実施など様々な領域での個別協力についてなど、具体的な意見の交換をした。交流の継続性については、ドイツ側はエイズ学会や行政が主体的にかかわっているのに対して、日本側にはこうした体制がとられておらず、交流に必要な予算基盤が確保されていないことが今後の最大の課題として挙げられた。

6. まとめ

今回、日独交流プログラムを実施して、基礎・臨床研究面に限らず、一般の人々・行政・メディアを含めたあらゆる局面においてエイズおよびHIV感染症に対する関心が薄れている我が国において、このような会議開催を契機に、さまざまな専門領域での横断的かつ縦断的な接触を地域レベルで繰り返し図ってゆくことが、実効的なエイズ対策を進める上で有意義なものであることを知った。これらの議論と反省を踏まえて、2006年11月24・25日にドイツ・ボッカム市にて第2回日独エイズ会議を予定し、現在そのための準備を進めている（詳しくは『第2回日独エイズシンポジウムのお知らせ』をご参照のこと）。わが国においても、日本エイズ学会あるいは財団法人エイズ予防財団等に、欧米の研究や予防活動との交流を深める事業企画があっても良いのではと思われる。

第2回日独エイズシンポジウムのお知らせ

昨年11月に名古屋で開催された第1回日独エイズシンポジウムでの成果を受けて、第2回日独エイズシンポジウムを以下の日程で開催することになりました。参加希望者は日本側の世話人までご連絡下さい。なお、旅行などに要する費用は開催予算が限られているために各自で負担していただくことになります。ただし、開催期間中のホテルの予約や現地までの行程や市内の案内、等は、ドイツ側主催者が一括して担当して下さいます。

参加希望者は、日本側の世話人に遅くとも7月31日までにご連絡下さい。シンポジウムでの発表者の選考は主催者側の判断に一任しますが、発表希望者はあらかじめ7月28日までに、所属と共同研究者名を含んだ英文抄録(400ワード以内)をお送りください。

日本側世話人

岡本 尚(名古屋市長立大学大学院医学研究科, 電話 052-853-8205,
ファックス 052-859-1235, 電子メール tokamoto@med.nagoya-cu.ac.jp)
市川誠一(名古屋市長立大学大学院看護学研究科, 電話 052-853-8089,
電子メール itikawas@med.nagoya-cu.ac.jp)

●スケジュール●

2006年11月24日(金)

開会宣言 ドイツ州政府厚生省 **Actors and Structures in Germany and Japan**

午前のセッション: 基礎医学

トピックス: 感染の遺伝要因, 代謝異常, HIV に対する細胞性免疫応答, **The immune response inflammatory syndrome (IRIS)**, HIV 感染に伴う中枢神経障害, 霊長類モデル, ワクチン, など

午後のセッション: 臨床医学

トピックス: 治療, HIV と肝炎ウイルスとの重感染, HIV と肛門の悪性腫瘍, など

11月25日(土)

午前のセッション: 予防, 社会医学, 市民社会活動

トピックス: ドイツ **AIDS-Hilfe** における研究とプロジェクト, アドヒアランス, などボッカム市内の **AIDS-Hilfe** への訪問と見学

午後のセッション: ビジネスミーティング

議題: 今後の日独共同プロジェクトについて

11月26日(日)

遠足(目的地は未定です)

●ドイツエイズ学会長 Brockmeyer 教授からの手紙●

親愛なる日本エイズ学会の皆様へ

私達ドイツエイズ学会は、第2回日独エイズシンポジウムへの日本エイズ学会会員の皆様のご参加をお待ち申し上げます。この会議は、別記のごとくの予定で、2006年11月24-25日にドイツのボッカムにて開催する

予定で準備を進めております。

ボッカム市について

ボッカム市はドイツの西にあり、コロンの北に位置し、オランダとの国境に近いところです。ボッカムはかつて石炭採掘で有名でしたルール地方の中核都市ですが、近年はドイツにおける様々な先端科学技術やメディアおよびデザイン等に関する産業の中心となっています。ボッカム大学は学生 40,000 人を擁し、ドイツ最大の大学のひとつです。

詳しい情報は以下のホームページでごらんになれます。

Bochum : [http : //www.bochum.de/english/](http://www.bochum.de/english/)

Ruhr-University Bochum : [http : //www.ruhr-uni-bochum.de/index_en.htm](http://www.ruhr-uni-bochum.de/index_en.htm)

ボッカム市における HIV と AIDS の状況

ボッカム市では HIV/AIDS に関する研究機関と医療機関が一体化されています。大学病院では Brockmeyer 教授を長とする学際的エイズ外来部門を持ち、およそ 500 人の患者の診療に当たっています。また、ボッカムにはドイツ国内の National Competence Network HIV/AIDS とドイツエイズ学会の事務局があります。ボッカムの AIDS-Hilfe は患者自らが運営する互助組織であり、全国組織の一環を担っています。ボッカム大学での研究は、これらの臨床研究や社会医学研究以外に、例えば Überla 教授が HIV ワクチンの研究を進めています。ボッカムを中心とするルール地方はドイツでも最も人口密度の高い地域であり、ボッカム大学以外にも多数の大学があり、多数の HIV 研究組織や医療施設があります。

シンポジウム会場

シンポジウムはボッカム大学病院 (the University Clinic Bochum) で開催されます。会議場は、病棟とは別の建物ですが、道を隔ててボッカム市民公園が近くにあり、会議で疲れた頭をリフレッシュしてくれるでしょう。参加者の宿泊するホテルはこのちょうど反対側にあります。



それでは、日本エイズ学会の会員の皆様と 11 月にボッカムでお会い出来るのを楽しみにしています。

ノルバート・H・ブロックマイヤー
ドイツエイズ学会長

Competence Network HIV/AIDS

Tel : (0234) 509-3471, 74

E-mail : n.brockmeyer@derma.de